

天からひびく十字架の信仰

今年、信州リトリート・コンサートで「キリストの十字架」のさんびが紹介されてから、各地の礼拝や集会でこの曲が歌われるようになっていきます。10月14日、ピーター先生、美津子さん担当の熊本合同礼拝で、できたてホヤホヤの「キリストの十字架」の()が新しくさんびされました。礼拝では、最初に新曲の()の方を歌い、続けて「キリストの十字架」(これが()になるわけですが)をさんびしました。不思議ですが、()が新しくできたことにより、()の方のひびきもさらに新しくされたのを感じました。

新しくされた「キリストの十字架」を聞いたある働き人が、こんなことを言いました。「十字架への自分の思いや信仰の告白をささげるといって、天からひびいてくる十字架の信仰告白に、ただ私たちの息を合わせればいいんだね」

私は「天からひびいてくる十字架の信仰告白」という表現に、何かとても心打たれるものがありました。キリストに出会った私たちにとって、「キリストの十字架にわがいのちあり」という信仰告白は最も大切なものです。わが魂の切なる思いです。その私たち一人一人の十字架の思いを含めて、さらに広くすべてを覆う十字架の信仰告白が天からひびいているのだと思います。

もし「キリストの十字架」が個人の思いや、個人の信仰告白としてささげられるさんびならば、十字架の意味を知った人、十字架がわかっている人だけのさんびにとどまってしまうでしょう。しかし、天からひびいてくる十字架の信仰告白は、個人の確信や思いを越えて、この地全体を覆い、包んでいるひびきです。そこには、十字架がわかる人も、わからない人も、いやあえて十字架を避け、遠ざかろうとしている人でさえも無条件に飲み込んでしまうひびきがある。なぜなら十字架の愛は、例外なくすべての人に注がれている愛だからです。天からひびいてくる十字架の信仰告白とは、すべての人を救いたいと願っておられる神の愛の告白です。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。
(ヨハネ 3:16)

このことを考えていると、美津子さんが1994年に見たカルバリの丘の十字架の瞑想を思い出しました。その時、美津子さんには洪水のような水の流れが押し寄せて来るのが見えたと言います。「その洪水は何ですか」と問う美津子さんに、主は「わたしのいやしだよ。救いの洪水である」と答えられますが、美津子さんはさらに「主よ、あなたを拒否したり、また反対する人や、異教を信じる人はどうされるのですか」と主に聞きます。それに対しての主の御声です。

この洪水がその者たちをよけて通るとでも思うのか

キリストの十字架の愛が洪水のように全地を飲み尽くすように、その人が知性や理性でわかろうと、わかるまいと、霊の一番深いところに届く十字架の信仰告白が、天からひびいている。「キリストの十字架にわがいのちあり」この信仰告白は人だけではなく、すべての生きとし生けるものに共鳴しているのです。

そして一人の働き人が言われた「天からひびいてくる十字架の信仰告白に、ただ私たちの息を合わせればいいんだね」ということを、私なりにイメージしながら考えてみました。

旧約聖書のなかには、「私の口(くちびる)にさんびを授けられた」というような表現がたくさん出てきます。もちろん口でさんびを歌うのですが、さんびは自分の全存在をあがなう十字架のいのちであることを思うたびに、どうしてさんびが、私の「魂」に、または私の「霊」に授けられた、という表現ではないのだろうかと考えました。こちらの表現の方が、自分の存在の深いところにさんびを注がれたことを思えます。なぜ「口」とか、「くちびる」という身体の一部なのか？

2000年、黙示録さんびがこの群れに与えられた当時、多くの人はまだこのさんびに託されたキリストのあがないのいのちのリアリティをわからずに歌っていました。私自身も、そして働き人のなかにも、「なんと低く単調なメロディだ、眠くなってしまう もっと明るいのがいいな」と心の中で思いながら、黙示録さんびを口ずさんだことがあります。それは表面の曲調のことだけではなく、黙示録さんびが地球の命運を左右するほどの神の願いを宿していることなど、想像もしていなかったからです。最初から私の魂がはっきりと黙示録さんびのいのちを受け取り、私の霊がそのいのちの壮大さに開かれていたわけではありませんでした。

しかし、私の理解や実感がどうであれ、今思えば私の口はたしかに黙示録さんびを歌ったのです。私のくちびるは、天のひびきを確かに口ずさんだのです。神が終わりの時にこの黙示録さんびを注いで下さった、という動かされざる真実がこの地には満ちていたのです。それが地をおおっていたのです。

そして私の「口」という身体の一部が黙示録さんびという天の息の流れと触れ合った時、そこから私の存在に驚くべきキリストのあがないの愛が浸透し始めた。そしてそれは私自身にとどまらず、私の口から発せられるさんびによって、キリストのあがないの愛が被造物にまで流れていくようになった。

さんびとは、天からのひびき、天の息の流れ。そしてこの天のひびきとの接点、私たちの口であり、私たちのくちびるです。イザヤ書には神のいのちがくちびるに触れた時の描写があります。

わたしの口に触れて言った、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」。
(イザヤ 6:7)

私は「キリストの十字架」をさんびする時、天からひびいている十字架の信仰告白が、私の息を出すこの口に触れるようなイメージをもって歌います。天からひびいてくる十字架の信仰告白に私の息を合わせる。十字架を完成させた神の愛のひびきに、私は自分の口を差し出す。

キリストの十字架にわがいのちあり。天より注がれるこの信仰告白に、地のすべてのものが息を合わせる時が来たのです。